

第13回 I U P A C 国際化学熱力学会議報告

標題の国際会議がフランス中部の大都市クレルモン・フェランで1994年7月17日から22日にかけて行われた。この学会は、I U P A Cという巨大組織が主催する数多くの国際学会の一つで、その中でも歴史の永い学会である。第1回は1969年にワルシャワで開催された。それ以前にも1959年から隔年に行われていたのですでに35年の歴史がある。



第13回国際化学熱力学会議会場（クレルモン・フェラン）

ポーランド化学アカデミーのジーレンキエヴィッチ教授がワルシャワ会議を開催したとき、その回から番号をつけることにし、第1回としたのであろう。今回はクレルモン・フェラン市郊外にあるブレーズ・パスカル大学の熱力学・化学工学研究所が運営にあたり、グロリエ教授が責任者であった。そしてフランス熱測定・熱分析学会との共催であった。参加者総数は445、発表件数は435で、いずれも大変多く、学会が成功裡に行われたことを示すと同時に運営委員会の苦勞が偲ばれる数字である。435件の内訳は招待講演28、一般口頭発表182件、ポスター発表225件であった。研究発表は10の分科会に分かれて行われたが、液体、流体、超臨界流体関連の発表が圧倒的に多数を占めていた。単純な分子性液体、その混合物、水素結合をもつ分子の場合、その多成分系、イオン性溶液、分子の会合、圧力効果、過剰ギブズ・エネルギー、過剰エンタルピー、過剰熱容量、過剰体積、相図、臨界状態、状態方程式等など非常に多くの研究が発表された。それぞれ詳しく聴くと面白い問題を含んでいるのだが、その多くは筆者の理解を超えていた。生体、界面、コロイド、ポリマーの熱力学にも多数の寄与があった。

研究者をこのように様々なテーマに向かわせる動機は何であろうか。新素材・新技術や原子力材料のようにセッション名で目的の明瞭な分野もあるが、そうでないセッションでも少し専門の違うものから見ると、これらのテーマのそれぞれに工学的な理由があるように思われる。熱力学は150年前に効率のよい蒸気機関を求める過程で次第に出来上がったが、化学熱力学はこの意味で明らかにこの伝統の上に、そしてヨーロッパの学問の伝統のうえにあると言えるだろう。第14回目はヨーロッパとアメリカを初めて離れ、アジアにこの学会が来る。1996年8月に予定される大阪での開催を是非とも成功させたいものである。

（松尾隆祐 記）